

標準 マーケットモデルは2次元で説明する。「取引できない商品」がマクロ経済変数などであるモデルを考えることは可能。非完備の場合、リスク中立確率は一意ではなく、価格も一意でなくなる。取引できない商品に対して「リスク中立確率」を考えても意味がないからである。無裁定条件の議論が適用できなくて、特定の同値確率測度が選ばれる理由がなくリスク中立確率のもとでの資産過程のモデルを最初から考えることの、利点と欠点。欠点は実確率との関係が不明瞭なので、モデルが仮に正し使ってリスク評価ができないこと。利点は実確率でのモデルにモデルを作成できること。価格が動いたときにはボラティリティは高くなっているだろうという合意が市場で形成されている、と解釈できる。数学的には正しくないが「関する帰納法」を考える。はの下でBMであることを「関する帰納法」を使って示す。に注意する。つまり「関する帰納法」の仮定よりが言える。よって全てに関してはブラウン運動と同じ期待値を持つ。独立性に関しても同じ議論を考える。なので「」の仮定よりいえる。現在のフレームワークにおいては、リスク中立確率を変えても現在の株価が変わることはない。これは実務上は非常に重要な利点である、と思われている。なぜなら知りたいのはデリバテ金融商品の価格付けとは、ある金融商品が持つリスクとリターンに、を与えるかを推定することである。原資産に対する評価は変化せず、別の言い方をすると、モデルのにおいて現在の株価の情報やりを本当使